

新潮文庫

完全な遊戯

石原慎太郎著



新潮社

完全な遊戯

定価 90 円

著者との了解により
検印を廃止致します。

新潮文庫

昭和三十五年十月三十日 発行
昭和三十六年九月五日 三刷

著者 石原慎太郎

発行者 佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 (341) 代表 (七二〇一) (三九)
振替東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊟

印刷・図書印刷株式会社 製本・憲專堂製本所

© Printed in Japan

新潮文庫

完全な遊戯

石原慎太郎著



新潮社版

1440

目次

完全な遊戯	七
若い獣	九
乾いた花	五
蟻女	一七
ファンキー・ジャンプ	一七

解説 江藤 淳

完
全
な
遊
戯

完全な遊戯

フロントグラスがいつの間にかまた薄く曇り始めた。

「雨か、また」

「ワイパーを入れようか」

「ああ」

小さな音をたててワイパーが動き出すと、窓にとまった霧のように小さい雨の粒子の被幕が筋を引いて左右に流れ出す。

「おっ」

言つて素速くハンドルを切つたが車は道に開いた穴へ大きな衝撃で落ちて過ぎた。

「やくざな道路奴！ 必ずどこかに穴がありやがる」

「何もそう飛ばすことあないぜ、夜は長えや」

助手席でワイパーの速度を調節しながら武井が言った。

「今夜のお前あ確かについていなかったぜ。持ち札が二点で二度コールして、二度とも奴がゼロまで切りやがった。が、ヤケで飛ばすのあ止めてくれよ。俺あ未だお前の道連れにやなりたくねえからな。まああきらめろ、勝負のつきにあ波があるってことよ」

「馬鹿言え、あんなブリッジなんぞ気にもしてねえよ。俺あ早く帰って寝たいんだ」
夜の街道にはもう他に車の影がなかった。

道路工事を示す赤いランプがせまって来る。

「ちえっ、またかい」

言いながら礼次は速度を落し車を逆の側に寄せて行った。

雨足が強くなったか、減速した車の外で辺りに降る雨の音が聞こえている。

道は工事のために五十米近く掘り起され、起された土やセメントの破片で車は幾度も激しく揺れた。

工事場を過ぎるとカーヴした道の両側に松並木が続き出す。僅かの間に雨はますます激しくなった。

人気がない道のかたわらに、笹を一杯積んだリヤカーが置きっ放しにされている。

「盗まれやしねえのか」

「ここらでそんな酔狂もいまい」

松林を過ぎ、橋を渡ったたもとバスのストップの小さな待合所の前に、女が一人立っていた。

正面からライトに照らされながら、車をバスでないと認めると女はさしていた黄色い雨傘を光をさえぎるように前へかざした。

車は減速して女の前を過ぎた。水色レインコートに白いハンドバッグと小さな風呂敷包みを下

げている。顔は良く見えない。

「今時もうバスはありやしないぜ」

振り返りながら武井が礼次に言う。

「時間表が出てねえ訳あないんだがなあ。いつまでああやって立ってやがるつもりなんだろう」
「拾ってってやるか」

「止せ止せ、方角が違ったら面倒だぜ。お前、自分で睡たいって言ってたじゃないか」

が前を過ぎながら減速したままの車を急に礼次は止めると、バックギアへ入れ直した。
戻って来た車を女は傘を上げて怪訝そうに見守っている。

車を前へつけると、窓からのり出し、

「バスあもうとつくにないぜ」

礼次は言った。

ゆっくり頷き返すと、

「こまったわ」

何だか、唄うような言い方で女は言った。

耳元で真珠のイヤリングがゆっくり揺れる。身につけているものは悪くなかった。一寸まくれ唇を薄く開いたまま、女は待っているバスの来る方をぼんやりいつまでも眺めている。目の切れ長な色白の女だった。二人は同じように、開いたままのレインコートの間の女の胸元を眺めて

いる。

一体こんな時間、近くに人家もないこの辺で、女が今まで何をしていたのか見当がつかない。

「こまったわ」

女はもう一度、唄うような口調で言った。

「バスはもう朝まで来ないぜ」

言った礼次を、女は黙って無表情に見返すと、突然にっとな笑ってこっくりする。

「何処まで行くの」

訊いた武井へ、

「横浜」鈍く、投げ出すように女は言う。

「何処？」

「藤沢の駅までいって、汽車で——」

「汽車だって、まだあるかな。危いもんだ」

と礼次がドアを開けて言った。

「お乗んなさい、駅まで送って上げる」

女はおびえたように長いこと彼の唇を見つめていたが、急にまた笑うとゆっくり頷いた。

「一寸待った、武井、お前、後に乗れよ」

「何故だ？」

「何故でもよ。わからねえ奴だ。いただきだよ、これあ」

うながすように低い声で言った。

「おっ」

指をはじいで、

「了解、了解」

素速く身をずらし外へ出ると、ドアのノブに手をかけ身をかがめ、からかうように丁寧な、

「どうぞ、お送りしますよ」

ゆっくり傘をたたむ女を二人は挟むようにして見つめている。

ギアを入れる礼次へ武井が軽く、

「何処で？」

「え」

訊き返す女へ、

「いや、一寸。貴女じゃないの。え、おい？」

「まかしとけよ」

言って、ふと女を横から見やったが、彼女は何故か放心したような表情で前を向いた切りだった。ライトの反射を受けて白く浮んだ横顔を見ながら、礼次は首を振り短く口笛を鳴らした。

「横浜には、家があるの」

「え」

「家がさ」

「ええ、横浜に行こうとしてたのよ」

答えにならぬ曖昧な女の言い方だった。

それ切り暫く三人が黙った。

肘で器用にハンドルを支えながら両掌で煙草をつけてくわえると、女にも、

「吸うかい？」

女は座席の上で体を動かし、向き直ると礼次を横からおずおず、がじいつと眺めている。

「え？ 煙草だよ」

「いらないわ」 ゆっくり首を振って女は言う。

「どうかしたのかい君、変じゃないか。そんな固くならなくて良いぜ、どうせ道順なんだ」

が、女はまた向き直り、同じように首を振ると言った。

「私、変じゃないわ、もう」

「もう？」

が女は黙った切りだった。

また松林が続き、それを過ぎると右手は背の低い松の繁みに遮られた向うに海岸の荒い草地が続いている。

「来た見てえだな、武井」

一人でつぶやくように礼次が言った。

「そうかね——。らしいや」

新しい同乗者にかまわぬように、武井が答える。

「え」

女が言った瞬間、礼次は右へ一杯にハンドルを切ったのだ。車は濡れたタイヤをきしませ右手の低い繁みの間を縫って草地の中へ入り込んだ。

低い叫び声を上げながら、はずみで女の体が投げ出されたように右へ崩れた。立ち直る暇を与えず礼次がその上からのしかかり、後のシートから武井が動かすまいとその両掌を捕えた。

瞬間、ひつと言うような低い悲鳴で女は体中であがいた。女と思えぬ猛々しい程の勢だった。握った手を振りほどかれた拍子に、武井は手の甲を下アの端にいやという程叩きつけられたのだ。

「この野郎！」

言って頭を押えつけるその掌の下で、女は何か訳のわからぬことを叫んだ。

「叫べよ！　が誰も来やしないぜ」

着たものをたくし上げながら礼次が言い返した。

女は尚叫んで身をよじった。

「黙らねえか、良い加減に！」

シートの背から殆ど全身を逆さにのり出した武井が、叫びながら女の眼の辺りを上から力一杯殴りつけた。女はそれでも叫んだ。が何故か突然、失神でもしたかのように女は温和しくなる。

「よしよし、なまじ言うことをきかないでいるよりそうしてりや顔も腫らさずにすむんだ」

女はそれ切り動こうとはせず、なすがままだった。

同じ姿勢のままで礼次が言った。

「おい、ヘッドライトを消しといてくれ。バッテリーが上っちゃまうからな」

武井が後から手を延ばしてスイッチを切り、それ切り辺りは真暗だった。近くで渚に打つ波の音が聞こえて来る。雨の音は先刻より軽くなったようだった。

「変るぜ」礼次が言った。

「よしおさえててくれろ」

「大丈夫、動きやしねえよ」

先刻から女は低い声で何か聞きとれぬことを言いながらじっとしたきりだった。

暗闇の中で、二人が前と後のシートへ入れ替った。

煙草をつけると途中で礼次は武井に渡した。

「吸うか？」武井が女に言った。

仰向けに倒れたまま、女が首を振るのが気配でわかった。

また雨が降り出し、強く車の屋根を叩いている。その中の暗闇で礼次がつけた二本目の煙草の